営農インフォ

水稲

◆水管理および中干し

この時期は除草剤の効果を持続させるとともに、根の活性を高めるため、水管理に留意する。高温が続くときは、有機物の分解に伴う有毒ガスが発生し、根腐れや下葉に酸素不足に伴う赤枯れ症状が発生することがあるので、そのときは落水し、間断かん水する。

中干しは出穂40～30日前に、根の張りを良くし、無効分けつを抑えるために行うもので、目標茎数が確保できたらその時点で行う。

時期の目安は、キヌヒカリなどの極早生品種は7月上旬、きぬむすめなどの早生品種は7月中旬、ヒノヒカリ、にこまるなどの中生品種は7月下旬に行う。あまり干し過ぎると逆に根を傷めるので、足跡がつく程度にする。強い中干しをすると根の回復が悪くなるので注意する。

◆穂肥

中干し後、葉色が退色したのを確認し、穂肥として、太閤（12-4-12）を10ａ当たり25～35kg施す。葉色が濃い場合は少なめにする。

穂肥は1回（出穂20日前）で済ませる場合もあるが、できれば施用量の3分の2の量を出穂25日前に、残りの3分の1量を出穂15日前に施用する。

ただし、ユーコート202等のコーティング肥料を元肥に使用した水田では穂肥は必要ない。遅くまで窒素肥料が効いていると食味が低下するので、追肥時期、施用量は生育状況にあわせて行う。

◆病害虫防除

・ニカメイチュウおよびウンカ類

ブイゲットフェルテラゼクサロンL粒剤を箱処理した場合は殺虫効果が長期に渡って持続するため、この防除は不要になるが、ブイゲットフェルテラゼクサロンL粒剤を施用していない場合、防除にはパダントレボン粒剤L（10ａ当たり3～4kg／収穫30日前まで／3回以内）などを田面に均一散布する。

・イネツトムシ

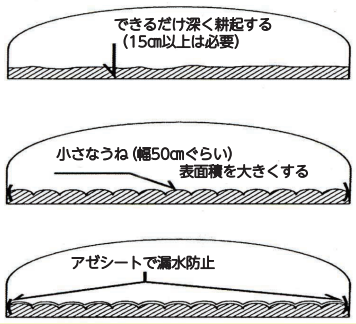
窒素肥料がよく効いている田では、葉色が濃く過繁茂となり、7月下旬から8月上旬にかけて幼虫が発生しやすくなる。田をこまめに見て回り、発生初期にパダン粒剤4（10ａ当たり3～4kg／収穫30日前まで／6回以内）などを田面に均一散布する。

野菜

7月中旬～8月中旬は一年で最も気温が高くなる時期で、太陽熱利用による土壌消毒の適期となっている。

ハウス栽培の水なすの半身萎ちょう病や、こまつなの萎黄病などの土壌病害も安全に消毒できる上、有機質資材を施用することで土づくりも同時にできるメリットがある。さらに引き続き除塩を行うと塩類濃度障害も回避でき、しゅんぎくの立ち枯れにも効果がある。

太陽熱利用による土壌消毒の方法



（図は大阪府農作物病害虫防除指針より抜粋）

①稲わら（1t／10ａ）、石灰窒素（80～100kg／10ａ）を入れ耕うん機で耕起する（連作ほ場で石灰が多量に土壌に残っている場合は、石灰窒素の代わりに尿素（40kg／10ａ）を施用する。また窒素が多く残っている場合は、尿素は施用しない）。

②耕起した後、幅50cmくらいのうねを立てる。

③ビニールフィルムで被覆する。

④被覆したビニールフィルムの下へ土を湿らす程度に水を入れる。水が十分入ったら、ハウスを密閉する。密閉状態で14～20日間放置する。途中で水を入れないこと。

⑤土壌消毒終了後、ハウスを開放し、ビニールフィルムを除去する。ほ場が乾いたら、うね立てを行う。

※除塩をする場合は、土壌消毒後たん水し、2～3回水を入れ替える。

※日照が十分得られることが成功のポイント。気温が低く日照の少ない冷夏の年は十分な効果が得られないことがある。

水なす

◆栽培管理

露地栽培では排水に努め、降雨後には滞水させないようにする。特に、降雨が続くと褐色腐敗病が発生するので、こまめに摘葉を行い、風通しを良くする。

農薬の登録内容は頻繁に変更されます。農薬は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (http://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html) から。
農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (http://www.jppn.ne.jp/osaka/)

また、土の跳ね上がり防止、雑草の発生抑制、土壌表面の急激な温度変化を避けるため、敷きわらやマルチを行う。

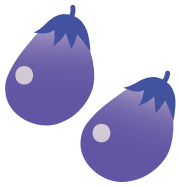
◆病害虫防除

梅雨が明けると害虫の発生が増加する。発生を見掛けたら早期防除を行う。同じ系統の薬剤を続けて散布すると薬剤抵抗性がつきやすいので、必ずローテーション散布を行う（表1参照）。

アザミウマ（スリップス）類の発生が多くなるので、発生初期の防除に努め、葉裏にも薬液がかかるように丁寧に散布する。

また、高温・乾燥が続くとハダニ類が発生し、多発すると防除が困難になるため、発生初期に防除を徹底する。

夏期には、オオタバコガの発生が多くなり、摘除した茎葉や果実にも卵や幼虫が付着していることがあるので、ほ場から持ち出して処分する。被害にあった果実を見つけたら、果実内やその周辺を探して虫を捕殺するとともに、薬剤による防除も行う。



さといも

◆かん水

梅雨明け後、乾燥が続くといもの肥大が悪くなり、収量に大きく影響するので、2～3日に1回程度、うね間かん水を行う。かん水は夕方から行い、朝には水が引いているようにする。

◆病害虫防除

アブラムシ類、カンザワハダニの発生があれば、表2の薬剤などで防除する。

しゅんぎく

◆土壌消毒

立ち枯れなど生育障害が出る場合は7月に太陽熱利用による土壌消毒とたん水除塩を行う。

◆病害虫防除

マメハモグリバエの被害が多い時期なので、収穫後は作物残さを残さないように、ほ場を衛生的に保つ。また施設の場合、収穫後にうね全面をビニールで被覆し、地表下の温度を上げて地中にいる蛹を殺すことも有効である。発生を認めたら表3の薬剤などで防除する。

こまつな

◆栽培管理

施設では日中は高温になるのでハウスの屋根に遮光ネット、寒冷しゃなどを展張する。

◆病害虫防除

キスジノミハムシの発生があれば、表4の薬剤などで防除する。

果樹

みかん

◆荒摘果

樹によって着果量にバラツキの出た園では、樹の状態を見て荒摘果を7月中旬から始める。また、病害虫被害果や傷果・天成り果・すそ成り果を摘果する。

◆病害虫防除

7月中旬にゴマダラカミキリ成虫を防除するには、トランスフォームフロアブル（2000倍／収穫前日まで／3回以内）を、カイガラムシ類の防除には、トランスフォームフロアブル（1000～2000倍／収穫前日まで／3回以内）を、ミカンサビダニの防除には、ダニエモンフロアブル（4000～6000倍／収穫7日前まで／1回）を散布する。

昨年ミカンサビダニの被害が発生した園は必ず防除を行うようにする。

もも

◆夏季せん定

他の枝の日照を遮るような徒長枝は間引く。

◆病害虫防除

7月上旬にモモハモグリガ、ナシヒメシンクイ、カメムシ類を防除するにはアルバリン顆粒水溶剤（2000倍／収穫前日まで／3回以内）を、ハダニ類の防除にはスターマイトフロアブル（2000倍／収穫前日まで／1回）を散布する。

黒星病、灰星病が多発する園では、ベンレート水和剤（2000～3000倍／収穫前日まで／3回以内）を散布する。

＊アルバリン顆粒水溶剤は、シンクイムシ類で登録がある。

いちじく

◆摘心

果実の着色不良や不要な養分の消耗を防ぐため、10月末までに収穫できない部分から上を伸ばさないよう摘心する。

摘心は下から20段前後の位置で行うが、摘心部分の高さを決めておけば葉数を数えなくても良いため省力的である。

◆病害虫防除

ハダニ類が発生していれば、7月中旬にダニトロンフロアブ

＊農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。

営農総合センター　指導販売課 072（444）8001

ル（1000～2000倍／収穫3日前まで／1回）を散布して防除する。

また、雑木林の近くでは、カミキリムシ類の被害を受けやすい。成虫は見つけ次第、捕殺しておく。樹幹部から幼虫が糞を出している場合は、園芸用キンチョールE（収穫前日まで／2回以内）のノズルを食入部に差し込み、薬剤が食入部から逆流するまで噴射する。

かき

◆摘果

上向き果を落とし、横向きや下向きで大きく、緑色が濃い果実を基本に、腰が高く、ヘタの大きいものを残す。摘果の程度は、富有柿などの大玉種では1結果枝に1～2果、平核無は長大な結果枝で2～3果を残す。着葉数が5枚以下の弱小枝には結実させない。

◆病害虫防除

7月下旬に炭そ病、落葉病の予防にトップジンM水和剤（1000～1500倍／収穫前日まで／6回以内）を、カキノヘタムシガの防除にパダンSG水溶剤（1500～3000倍／収穫45日前まで／4回以内）または、アディオン乳剤（2000～3000倍／収穫7日前まで／5回以内）を散布する。カメムシ類が見られたら、スカウトフロアブル（1500倍／収穫7日前まで／5回以内）、または、アディオン乳剤（2000～3000倍／収穫7日前まで／5回以内）を散布する。

表1 なすの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	IRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
アザミウマ類	アルバリン顆粒水溶剤	4A	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	コテツフロアブル	13	2000倍	収穫前日まで／4回以内	100～300ℓ／10a
	アファーム乳剤	6	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	スピノエース顆粒水和剤	5	2500～5000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
ミカンキイロアザミウマ	アーデント水和剤	3A	1000倍	収穫前日まで／4回以内	150～300ℓ／10a
	コテツフロアブル	13	2000倍	収穫前日まで／4回以内	100～300ℓ／10a
	スピノエース顆粒水和剤	5	2500～5000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
ハダニ類	スターマイトフロアブル	25A	2000倍	収穫前日まで／1回	100～300ℓ／10a
	ピラニカEW	21A	2000～3000倍	収穫前日まで／1回	150～300ℓ／10a
	マイトコーネフロアブル	20D	1000倍	収穫前日まで／1回	100～300ℓ／10a
オオタバコガ	アファーム乳剤	6	2000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	コテツフロアブル	13	2000倍	収穫前日まで／4回以内	100～300ℓ／10a
	スピノエース顆粒水和剤	5	5000倍	収穫前日まで／2回以内	100～300ℓ／10a

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。
※アルバリン顆粒水溶剤、アファーム乳剤、スピノエーム顆粒水和剤は、アザミウマ類で登録がある。

表2 さといもの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	IRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
アブラムシ類	アディオン乳剤	3A	3000倍	収穫7日前まで／5回以内	100～300ℓ／10a
	アドマイヤー顆粒水和剤	4A	10000倍	収穫14日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
ハカザダニ	コテツフロアブル	13	2000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表3 しゅんぎくの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	IRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
ハモグリバエ類	アファーム乳剤	6	2000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	トリガード液剤	17	1000倍	収穫7日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a

※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

表4 こまつなの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	IRACコード	希釈倍数	使用時期／使用回数	10a当たりの散布液量
ハスモンヨトウ	アルバリン顆粒水溶剤	4A	2000倍	収穫3日前まで／2回以内	100～300ℓ／10a
	モスピラン顆粒水溶剤	4A	4000倍	収穫7日前まで／1回	100～300ℓ／10a

※アルバリン顆粒水溶剤、モスピラン顆粒水溶剤は、非結球あぶらな科葉菜類（チンゲンサイを除く）で登録がある。
※IRACコードが同一であれば、有効成分が異なっていても同一系統の薬剤なので、連用は避けなくてはならない。

＊農薬名の後の括弧内は、（希釈倍数／使用時期／総使用回数）を表示しています。